JASPO

がん診療病院連携研修紹介

一般社団法人 日本臨床腫瘍薬学会

医療チームの一員として

理事長　加藤 裕芳

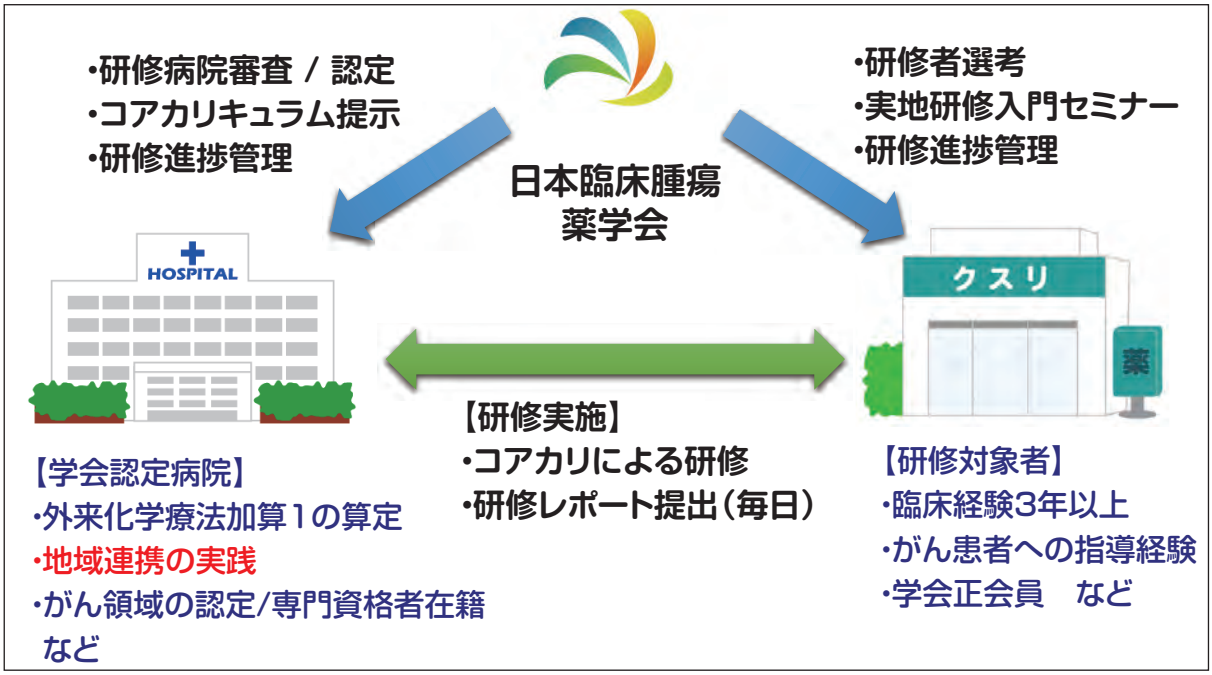
一般社団法人日本臨床腫瘍薬学会（Japanese Society of Pharmaceutical Oncology：JASPO）では、薬局に勤務する薬剤師を対象としたがん診療病院連携研修を昨年の１月から開始しました。この研修は、薬局に勤務する薬剤師が臨床の現場で医師や看護師とともにがん患者に向き合うことで、がんに関する高度な知識や技能を習得してもらうとともに薬局薬剤師が医療チームの一員としての役割を果たすために必要な病院との連携も理解してもらうことにあります。病院では、2014 年の厚生労働省医政局長通知 (医政発 0430 第 1 号) により、処方提案など薬剤師が医師と協働して薬物治療を担う PBPM（Protocol Based Pharmacotherapy Management）が積極的に進められ、安全ながん薬物治療を行う上で、薬剤師が大きな役割を担っています。研修では、医師の診断や治療方針の決定そして患者説明を聞き、看護師による観察やケアなどを見学する中で、目の前の患者の問題点を自ら考え、解決策を自ら調べ、チームとともにそれを実践してください。そうした経験が研修を終えて薬局に戻ってからがん患者に関わる上での自信となり、顔の見える病院と薬局の連携に繋がるものと思っています。

2021 年８月より専門医療機関連携薬局（がん）が施行開始となりました。JASPO ではその要件のひとつである学会が認定する専門性を有する薬剤師として外来がん治療専門薬剤師（Board-certified Pharmacist of Ambulatory Cancer Chemotherapy：BPACC）の認定（暫定）を 2021 年４月より開始しました。BPACC は、2014 年から認定を行っている外来がん治療認定薬剤師（Accredited Pharmacist of Ambulatory Cancer Chemotherapy：APACC）がこのがん診療病院連携研修を終了するかもしくはそれと同等の勤務歴や研修歴を有する者に認定されます。BPACC は、がんの専門的な知識や技能を有するとともにそれらを基に病院と薬局が緊密に連携してがん患者をサポートできる薬剤師のことです。多くの薬局薬剤師がこの研修に受講したうえでこの BPACC を取得し、がん患者のより明るい未来に貢献することを願っております。

今回、厚生労働省の令和３年度認定薬局等整備事業（専門性の高い薬局薬剤師の養成推進事業）を受け、がん診療病院連携研修を紹介する冊子を作成しました。この冊子には、すでに研修を終えた８名の研修生とその施設の指導薬剤師との対談事例が掲載されています。それには、８つの教える側の思いと教わる側の感謝そして研修における創意工夫の生の声が掲載されています。これから研修生を受け入れようと考えている施設、そして研修を受けたいと考えている薬局薬剤師の方々にお読みいただければと思っております。JASPO では、今後とも研修施設数の拡大に努め、研修生が出来るだけ身近な研修施設で研修を受けられる体制を築いていきたいと考えております。多くの方々に読んでいただく中でこのがん診療病院連携研修が益々普及することを願っております。

最後に、本冊子の作成のご協力いただきました研修修了生ならびに研修受け入れの施設の指導薬剤師の方々に感謝申し上げます。

がん診療病院連携研修概要



がん診療病院連携研修の概要図

1．研修の目的

本研修は、がんの専門的な知識や技能に加え、臨床経験を修得し、病院と緊密に連携してがん薬物療法に対応できる薬局薬剤師を養成することにより、外来がん治療を安全・有効に施行するとともに、地域がん医療において、患者とその家族をトータルサポートできることを目的とする。

2．研修者の対象と選定

① 本研修は、日本臨床腫瘍薬学会の正会員であって、３年以上の実務経験を有し、原則、薬局に勤務する薬剤師を対象とする（病院および診療所などに勤務する薬剤師も研修者とすることができる。）。

② 研修者の選定は、日本臨床腫瘍薬学会外来がん治療認定薬剤師申請資格を参考にして、日本臨床腫瘍薬学会が行う。

③ 研修者は、薬局などにおいて、がん患者に対する服薬指導（薬学的管理を含む。）や薬物治療モニタリングの経験を有する必要がある。

④ 研修者は、日本臨床腫瘍薬学会が主催するスタートアップセミナーまたはブラッシュアップセミナーのいずれかまたは両方を過去 3 年以内に受講していることが望ましい。ただし、日本臨床腫瘍薬学会外来がん治療認定薬剤師等がん領域の専門・認定資格を有している場合は、この限りではない。

3．研修病院

研修病院は、下記（ア）の①～⑧および（イ）の①～③を満たしているものとして、日本臨床腫瘍薬学会が認定する病院であること。

（ア）病院としての要件

① 研修責任薬剤師は、研修病院の薬剤部門長（部門長が薬剤師以外の職種の場合は、部門長から委託された薬剤師）とすること。研修責任薬剤師は研修指導薬剤師に指示し、自施設の研修カリキュ

ラムおよび研修計画の作成、病院内の関係部門との調整、研修者の総括評価などを行うこと。
② 薬剤部門において、がん薬物療法に対して薬剤師が行うべき実地研修項目の指導ができること。
③ 当該病院に、日本臨床腫瘍薬学会認定外来がん治療認定薬剤師、または日本病院薬剤師会認定がん薬物療法認定薬剤師もしくは日本医療薬学会認定がん指導薬剤師・がん専門薬剤師が 2 名以上在籍していること。なお、 1 名は日本臨床腫瘍薬学会外来がん治療認定薬剤師であることが望ましい。ただし、当面の間、認定資格者が 1 名の病院であっても、日本臨床腫瘍薬学会が十分な研修体制が整っていると判断した場合は、暫定研修病院として認定することができる。
④ 外来化学療法室等において、薬剤師が患者等を指導できること。
⑤ 緩和ケアにおいて、薬剤師がチームまたは病棟等で関与していること。
⑥ がん患者の症例カンファレンスに薬剤師が参加していること。
⑦ 院外処方箋を発行しており、処方箋応需薬局などと連携し、患者の治療に当たっていること。
⑧ 臨床腫瘍学およびがん薬物治療学を指導するのに十分な資質を兼ね備えた医師が勤務していること。なお、放射線治療医、臨床病理医、精神腫瘍医、緩和ケア専門医など専門知識を有する医師が勤務していることが望ましい。

（イ）設備等の要件

① 本研修のカリキュラムを遂行することのできる入院病床、外来化学療法室等が整備されていること。
② 次の診療報酬の施設基準を全て届け出て、算定していること。
・外来化学療法加算 1（2022 年 3 月時点）　・薬剤管理指導料　・無菌製剤処理料 1
③ 次の診療報酬の施設基準を全て届け出ていることが望ましい。
・がん診療連携拠点病院加算　・がん患者指導管理料ハ　・病棟薬剤業務実施加算
・連携充実加算　・抗悪性腫瘍剤処方管理加算　・外来緩和ケア管理料
・緩和ケア病棟入院料又は緩和ケア診療加算

4. 研修期間

本研修では、全 30 単位を研修開始から 1 年以内に修得する必要がある。なお、1 週間に 0.5 単位以上を修得することが望ましい（研修病院の長期休業期間を除く。）。
① 1 単位は、研修病院の 1 日の就業時間を示す。
② 0.5 単位は、研修病院の半日の就業時間を示す。
③ 原則 1 回の研修時間が半日に満たない場合は、履修単位に換算することはできない。

5. 研修の内容

本研修の内容は、日本臨床腫瘍薬学会がん診療病院連携研修コアカリキュラムに従う。

（ア）講義研修の受講

研修者は、研修開始前までに別に定める「実地研修入門セミナー」をすべて修了しなければならない。実地研修入門セミナーは、実地研修を円滑にすすめるために必要な知識を修得するためのものである。

（イ）実地研修

実地研修は、研修病院が、日本臨床腫瘍薬学会がん診療病院連携研修コアカリキュラムに定める研修の到達目標に従い実施する。

（ウ）研修記録

研修者は、研修実施日に所定の書式に研修内容を入力する。入力したファイルは、研修管理システムにファイルとして掲載する。研修指導薬剤師は、その記録の内容を確認し、研修管理システム内で承認を行う。

（エ）課題研修

研修者は、研修の修了に当たって、病院内の報告会等で担当した介入症例などを発表すること。

事例 1
連続研修

双方にとってプラスになる研修

社会医療法人財団 慈泉会
相澤病院
野村　充俊

■病院概要

①病床数：460 床
②薬剤師数（内､外来がん治療に従事する薬剤師数）:33 名（3 名）
③外来化学療法件数（月平均件数）：約 300 件
④特徴（各種研修やアピール等）：地域がん診療連携拠点病院、先進医療「陽子線治療」、がんゲノム医療連携病院、学生実習受け入れ、緩和ケア・NST などチーム活動

●研修病院になるきっかけを教えてください。

病院のある松本地域は薬薬連携が他地域と比較しても進んでおり、近隣の薬局なども顔の見える関係であることから様々な事を直接聞くことができる環境であり、その中で研修の要望もあがっていた為、病院として受け入れるようになりました。

●受け入れにあたって苦労された点や調整された点は？

特に大きな苦労はありませんが、一番は受け入れにあたって他の職種の方との調整ですね。ここは逆に教えていただく事も多いので。また、ちょうどトレーシングレポートを始めた時期でもあったため、大木先生から薬局で介入した事例などを研修前に送ってもらい、現時点での理解度などを確認しました。

●研修プログラムを組む上での工夫したことなどがあれば教えてください。

最初に 30 日分のカリキュラムを大まかに作成しましたが、その際にできるだけ実際の患者さんと関わる時間を多く確保できるようにしました。また、がん治療に関わっている他職種の業務見学や、NST などのチーム活動、「エキスパートパネル」などへの参加、研修者の担当をしていた薬剤師の機転で連携していた門前の薬局へ見学に行くなど病院独自の内容も研修者の希望や到達度に応じて組み込みをしてみました。

●研修者の受け入れにより部内の負担は増えましたか？

研修初期は必ず部内の一人は研修者対応が必要な為、その分の負担は増えてしまいましたが、研修後期には一人で患者さんのところへ行き、面談・指導をした上で、報告をあげてもらうレベルに達したので、部内の負担は大きく軽減されました。
また、どうしても人員を割くことが難しい場合には、医師の診察への同行や看護師業務の見学、ミキシング業務の見学など出来る限り有意義に研修が進められるように工夫をしました。

●先生の病院では連続研修にて受け入れをされていますが、ご意見などがあればお聞かせください。また、30 日という研修期間についてもあわせてご意見などがあればお聞かせください。

当初は連続（連日）にて受け入れをしましたが、現在は週 2 回にて受け入れをしています。連続でない場合は同じ曜日のイベントや会議など、例えば本院では「エキスパートパネル」等は第 1 および第 3 週のみ実施をしているので、曜日が合えば毎回の出席や回数が多くなる等といった良い面もありますが、連続の場合は集中して知識や経験を積むことが出来るという長所もあるため、一長一短であるなと感じています。
研修期間については現状では丁度いいのではと感じています。研修の最後の方では研修者一人で業務を遂行できるぐらいのレベルに到達し、こちらが大変助かることもありました。

●研修受け入れをして発見された事や課題があれば教えてください。

大木先生は日々の課題や研修時にわからなかった点などは週末を利用し調べるなど予習復習をして研修に参加をしていたので、意思疎通も非常にスムーズでした。中でも復習については、研修開始まえに修了が義務づけられている「実地研修入門セミナー」の動画を繰り返し視聴され、非常に努力をされていたのが印象的でした。
課題については研修者のニーズにマッチした研修が行えているのかが、実施例もまだまだ少ないため実質的な検証はこれからですが、研修期間内でのカリキュラムの達成度については現在までは概ね高いレベルで推移し、大きな問題もなく研修が実施出来ていると思います。

●これから研修受け入れを検討している病院へメッセージをお願いします。

例えば、「処方箋」は手元を離れた後に実際にその先はどのように進められているのか、また連携のツールとしてレジメン情報等を記しお薬手帳に貼付しているシールの記載項目について、受け取る側の意見を直接聞けたりと、病院（薬剤師）にとっても大きなプラスになります。院内にいるだけでは把握ができない情報や動きなども教えてもらう事が出来るため、教えるだけではなく双方にとってプラスになる研修だと思います。

●これから研修参加を考えられている薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

実際の治療現場で研修をすることによって薬局での投薬時の聞き取りだけでは把握をしきれない患者さんへの治療の流れを理解できると思います。

がん治療に関する知識が大幅に向上し、自信につながる研修

株式会社クオシア
赤坂てんじん薬局
大木　洋介

■薬局概要

①薬剤師数：5 名
②月の処方箋応需枚数：1,000 枚
③がん患者数（月平均）：50 名程度

■外来がん治療認定薬剤師または専門薬剤師の取得有無（無しの場合は今後の取得予定）

取得なし。今後取得予定。

●研修に参加しようと思ったきっかけは？

2020 年の診療報酬改定から化学療法レジメンの公開や治療の実施状況の交付等によりがん患者への介入がしやすくなりましたが、患者のフォローにあたっては専門的な知識や連携部分が不足している事を感じていました。
実際の病院内での治療や薬の副作用に対応するための知識、薬薬連携の取り組みなどを学びたいと考えて応募しました。

●研修病院である相澤病院はどのような視点で選びましたか？

参加のきっかけの一つである薬薬連携について、地域薬剤師会と共同した研修会の開催など県内でも連携が進んでおり、また公開されているレジメンや資料の内容などが大変充実していたことから相澤病院を希望させていただきました。

●研修参加にあたって勤務している薬局からはどのような支援がありましたか？

勤務している薬局では現場スタッフ、患者さんが共に困らないように配慮していただき、研修に集中することができました。また、研修にかかる費用の負担や休暇ではなく定時勤務扱いにしていただき、非常に感謝しています。

●研修にあたり準備したことがあれば教えてください。

研修病院のインターネット上に公開されているレジメンや資料の確認、日本臨床腫瘍薬学会で実施されているスタートアップセミナーを受講し、まずはがんの基礎知識をつけることから始めました。また、研修病院の先生に普段使用されている書籍を伺い「がん化学療法レジメンハンドブック」、「がん化学療法副作用対策ハンドブック」、「がん診療レジデントマニュアル」などを購入しました。事前にどのような準備をしたら良いかを研修病院に確認しておくと研修がスムーズになると感じました。

●研修プログラムで特に興味深かったこと、印象に残ったことがあれば教えてください。

「エキスパートパネル」に 5 回ほど参加をさせていただき、がん遺伝子パネル検査について学びました。難しい分野であると感じましたが、検査により遺伝子変異を明らかにして個々にあった治療を実施すること、未発売薬の使用の検討など、非常に興味深く今後増々必要とされていく分野であると感じました。また、研修カリキュラムには組み込まれていませんでしたが実際に研修病院と連携している薬局を見学させていただき、薬薬連携について参考にさせていただきました。

●研修後に意識の変化などはありましたか？

研修前は知識や連携不足により自信が持てなかった部分もありましたが、研修によってがん治療に対する知識が向上したことで自信を持って対応が出来るようになりました。現状、薬局内ではがん患者のフォローは経験のある薬剤師が対応していますが、薬局全体で取り組めるよう知識の共有をしています。

●研修後に薬局にて役立ったエピソードがあれば教えてください。

研修中に免疫チェックポイント阻害薬の免疫関連有害事象 irAE について学び、ステロイド服用中の患者さんを見学させていただきました。研修後に今まで甲状腺機能低下がありチラーヂンを服用している患者さんがキイトルーダによる irAE であることが判明し、来局時に irAE の一覧表を用いて副作用の発現がないか確認するようになりました。

●研修参加を検討している薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

がん患者が病院でどのように治療を受けてくるのか、医師や看護師、栄養士など多職種と病院薬剤師がどのように連携をとり、チーム医療を行っているのかなど、薬局では得られない多くの経験をさせていただきました。私自身はこの研修を通してがん治療に対する知識が大きく向上したことで、自信をもって指導が出来るようになり、患者さんからの信頼につながりました。 外来での治療や内服の抗がん剤が増えていく中で薬局薬剤師のがん患者フォローの必要性が高まってきています。がん治療の分野は進歩が著しく、常に知識のアップデートが必要な為、研修を受けることで終わりではありませんが、これからの薬局薬剤師に必要とされるスキルとなってくると思いますので、興味がある方は研修に参加されることをおすすめします。

事例2

連続研修、通年研修（週1回）

連携の必要性を再確認できる研修

川崎市立多摩病院
坪谷　綾子

■病院概要

①病床数：376 床
②薬剤師数（内、外来がん治療に従事する薬剤師数）:24 名（12 名）
③外来化学療法件数（月平均件数）：120 件
④特徴（各種研修やアピール等）：
緩和医療専門薬剤師研修施設（日本緩和医療薬学会）
2022 年度に緩和ケア病棟を開設予定

●研修病院になるきっかけを教えてください。

当院は地域医療支援病院として、地域の市民を強く意識した診療を展開しています。一方、大学の附属病院として、高度医療の提供、教育・研究面にも力を注いでいます。近年、経口薬・注射薬との併用による化学療法や多彩な副作用を呈する分子標的治療薬が登場し、専門的な介入を要するケースが増えています。また、タスクシフティングの推進により、病院薬剤師は院内の様々な業務に携わることが求められ、限られた人数で外来がん治療をフォローするのは難しく、地域の薬局薬剤師との連携の必要性を感じていました。薬局薬剤師が病院でがん治療を経験できる本研修は、がんの地域連携を推進する契機になると考え応募しました。

●受け入れにあたって苦労された点や調整された点は？

コロナ禍であり、密にならないよう、薬学実務実習生や他職種の院内実習受け入れ状況を確認し研修生の受け入れ期間や人数を調整し、あわせて他職種の方に地域の薬剤師の顔を知っていただく為に本研修への関わりをお願いしましたが、概ね好意的な形で受け止めていただき、受け入れにあたっては大きな苦労はありませんでした。

●研修プログラムを組む上での工夫したことなどがあれば教えてください。

当院は診療科が限られているため、法人間での連携をお願いしました。聖マリアンナ医科大学病院（がん診療連携拠点病院・がんゲノム医療拠点病院）と連携し、キャンサーボード、抄読会やセミナー等に参加（オンライン）、乳腺診療に特化した聖マリアンナ医科大学附属研究所 ブレスト&イメージング 先端医療センター附属クリニックでの見学・研修の機会を設けました。また、がんチーム医療について研修できるよう院内の他職種（医師、看護師、管理栄養士、理学療法士、診療放射線技師、社会福祉士、事務など）にも講義や部署見学を依頼し、緩和ケアチーム回診に同行等を実施しました。

●研修者の受け入れにより部内の負担は増えましたか？

指導にあたる薬剤師は、日々の指導、研修記録の確認など負担は増えました。なるべく薬学実務実習生の担当者と重複しないように担当者を調整しました。一人に負担が集中しないよう複数病棟、外来指導、抗がん剤調製など多くの薬剤師が関わるようにしました。

●先生の病院では連続研修と週 1 回の研修、両方にて受け入れをされていますが、ご意見などがあればお聞かせください。また、30 日（回）という研修期間についてもあわせてご意見などがあればお聞かせください。

当院は最初のパイロット研修を「連続研修」で実施し、今年度は「週 1 回の研修」を実施しています。連続研修は、他職種の方とも比較的短期間でコミュニケーションを図る事ができ、様々な点を調整する上では受け入れやすさを感じました。対して週 1 回の研修では、薬局の先生は業務と並行して研修を続けることができるため、参加されやすいのではと思いました。

●研修受け入れをして発見された事や課題があれば教えてください。

顔の見える関係が構築でき、薬局薬剤師の業務について認知度が高まり、他職種からも好意的な意見が寄せられました。
医師：専門的なフォローができる薬局があると処方する側も安心して任せられる
看護師：薬局での患者の相談内容、サポートなど患者に情報提供できる内容が増えた
管理栄養士：学生実習も受けており特に負担ではない
社会福祉士：在宅支援で関わるため、薬局薬剤師とのつながりができるのはよい
研修施設が増えて、地域の薬局と病院がマッチングできると良いと思います。せっかく研修を受け入れても市外の薬局ですと、その後の連携に直接的にはつながりにくいのが課題です。

●これから研修受け入れを検討している病院へメッセージをお願いします。

研修受け入れにはいろいろと調整したり、業務負担も増えたりするのではと心配されているかもしれません。しかし長い目でみると、専門的な管理のできる薬剤師が増えることで、病院・薬局が緊密に連携して安心安全ながん医療を提供し、地域で患者さん、家族をトータルサポートできるようになると思います。まずは 1 人からでも受け入れてみるとハードルが下がるのではないでしょうか。

●これから研修参加を考えられている薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

研修を通じ、病院薬剤師だけでなく様々な医療者と関わることで、がん治療の知識のみならず、共有が必要な情報や事例など学んだり、実務に直結することが経験できたりすると思います。受け入れる病院側も研修の先生方から学ぶことが多いので、研修に来ていただけるのを楽しみにしています。

日々の業務にプロ意識が芽生える研修

日吉木月薬局
田村　崇幸

■薬局概要

①薬剤師数：6 名（非常勤含む）
②月の処方箋応需枚数：1,000 枚
③がん患者数（月平均）：5 名程度

■外来がん治療認定薬剤師または専門薬剤師の取得有無（無しの場合は今後の取得予定）

外来がん治療認定薬剤師　今後申請、取得予定

●研修に参加しようと思ったきっかけは？

化学療法治療自体が従来では病院内にて完結をしていましたが、経口薬などの登場により外来にシフトしている事は薬局内でも感じていました。中でもがん化学療法を受けられている患者さんへの服薬指導は、本人やその家族からのニーズがあるにも関わらず、知識不足や経験不足により、患者さんの不安や疑問に対応出来ないことに、もどかしさを感じていた折に、専門医療機関連携薬局制度がスタートし、先ずはその先陣を切り、薬局内のスタッフのモチベーションの向上にも繋げようと思い、応募しました。

●研修病院である川崎市立多摩病院はどのような視点で選びましたか？

がん化学療法にかかる治療の連携には、医療機関との情報共有が不可欠になりますので、薬局に近い（出来れば医療圏が同じが望ましいと思います）施設を中心に、自薬局に出来るだけ近い施設を希望させて頂きました。

●研修参加にあたって勤務している薬局からはどのような支援がありましたか？

私自身が薬局の開設者であり現場にも出ていますので、研修参加日には薬局内のスタッフに代理で現場指揮や在宅の方の対応のお願いなどをし、薬局全体で支えていただきました。本研修の成功可否は、開設者・管理者・スタッフの支援が不可欠であると強く思います。

●研修にあたり準備したことがあれば教えてください。

実地研修前に受けた JASPO の入門セミナーの内容（大腸がん・胃がん・乳がん・肺がん・血液がんの「五大がん」の病態や治療について）を復習すると同時にがん治療に関する様々な書籍を購入し、基本的な知識をしっかりとつけた上で研修にのぞみました。また、自身が持つかかりつけの患者さんに対しては事前に後日フォロー等を含めお伝えをし、同時に薬局内も代理の対応などの調整をし、来局時にも困らないよう準備をしました。

●研修プログラムで特に興味深かったこと、印象に残ったことがあれば教えてください。

上記の準備をしていたにも関わらず、良い意味であまり役には立ちませんでした（もちろん予備知識という意味では必須であると思います）。実際にはガイドライン通りに処方がされていることがほとんどなく、患者さん一人一人の年齢や体調また精神状態なども加味をした上で、治療は進められており、私自身は完全にガイドラインに沿った治療をイメージしていましたので、そのギャップが強く印象に残りました。

また、病院内におけるがん化学療法に関して、薬剤師が多大な貢献をされている点も非常に印象的でした。レジメン審査委員会・化学療法の副作用マネジメント等においては、薬剤師なくしては成り立たないと思うほど貢献し、他職種からも信頼されていることがとても良く伝わり、同業者として誇りにも思えました。

●研修後に意識の変化などはありましたか？

がん化学療法に対する勉強をさせていただくことで、実際の服薬指導における自身の間口が広がったと感じることが出来るようになりました、同時にメインの化学療法はもちろんのこと、併用されている薬剤などの投与意義などまでを理解して指導が出来るようになったと感じています。

また、がん化学療法とは無関係ですが、病院薬剤師の方の病院内での活躍ぶりを目の当たりにして、自身の薬剤師としてのプロ意識をもっとしっかりと持つべきであると感じることが出来るようになりました。

●研修後に薬局にて役立ったエピソードがあれば教えてください。

在宅医療でがん治療をされている患者さんの副作用の問い合わせがあった際に、具体的な指示を示すことが出来ました（便秘時、どの様な状態時に薬を使用する、医師に連絡する　など）。この辺りは知識を持っているだけでなく、実際に指導・経験していないと自信をもって具体的な指導が出来ない点であると感じています。

●研修参加を検討している薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

化学療法は間違いなく入院から外来へとシフトしており、地域の薬局薬剤師こそ、かかりつけ患者さんの「がん化学療法」に積極的に関与するべきであると思います。多忙な日常業務に加えて、研修を受講することはハードですが、本研修はご自身にとっても、地域の方やご自身の薬局にとっても、大変有意義な経験となることは間違いありません。薬剤師として新たな境地が見られることと思います。

事例3

連続研修

自施設の見直しや指導薬剤師の成長にもつながる研修

国立研究開発法人
国立がん研究センター東病院
松井　礼子

■病院概要

①病床数：425 床
②薬剤師数(内、外来がん治療に従事する薬剤師数):54 名(8 名)
③外来化学療法件数（月平均件数）：4,085 件
④特徴（各種研修やアピール等）：
平成 28 年より当院の独自主催で保険薬局の先生方の受け入れを行っており、実績があります。がんの専門施設として様々な癌腫と症例を経験できることや、がんゲノム医療でのエキスパートパネルの見学等、ご希望があればオプションのご相談にも柔軟に対応しています。

●研修病院になるきっかけを教えてください。

保険薬局の先生が病院での研修を受ける事ができるように、平成 28 年度より当院独自で 2.5 か月の少々長めのスパンで受け入れを実施してきました。今回、JASPO の研修制度が始まる事をきっかけにして、研修生の方の認定に繋がるメリットを考え、がん診療病院連携研修の研修病院としての受け入れを開始することにしました。

●受け入れにあたって苦労された点や調整された点は？

カリキュラム作成には部内・部外の調整と協力のもと作成を行いました。病院側は幹部決裁にて病院幹部の合意をいただき、人材育成センターと連携をして受け入れを行いました。他職種でも研修を受け入れている施設のため、大きな苦労はありませんでしたが、組織の特性上、院内の連携部分での調整が少々必要でした。

●研修プログラムを組む上での工夫したことなどがあれば教えてください。

まず、色々な癌腫の患者さんや薬剤師の役割を理解していただくために入院患者さんの研修から開始し、後半で外来治療（他種多様の癌腫を担当する。）の研修を組むようにしました。当院の外来は様々な癌種の患者さんが様々な治療をしているため、まず入院患者さんで病院に慣れる時間と、指導薬剤師がそれぞれの癌腫に対してどのように対応をしているのか見学、実践をした後に、外来に進む方が身につくのではないかとのスタッフの意見があったので、特色の一つとして加えました。

●研修者の受け入れにより部内の負担は増えましたか？

当院は様々な研修生を受け入れているため、指導をお願いしている部員には多くの負担をかけていると思います。そのため、キャパオーバーしない様な受け入れ人数の設定と指導薬剤師の負担を平均化する様に配慮しています。また、部員が研修生との交流することで、特に若い病院薬剤師には少し幅広い視点で地域連携の大切さ等を見る事ができる良い機会になっていると感じています

●先生の病院では連続研修にて受け入れをされていますが、ご意見などがあればお聞かせください。また、30 日（回）という研修期間についてもあわせてご意見などがあればお聞かせください。

連続して研修を進める方が患者さんの継次の流れも理解ができ、集中して知識を吸収できる観点から良いと考えています。しかし、週 1 回程度の研修においても、長期的なスパンで知識の吸収や経験ができる利点もある事が別に受け入れをしている研修で成果が出ていますので、しっかりと枠組みを作ることができれば、週 1 回での受け入れも整備したいと思っています

●研修受け入れをして発見された事や課題があれば教えてください。

現在は連続研修での受け入れのみを行っていますが、今後は週 1 回ごとで希望される薬剤師の方の受け入れも出来る様にカリキュラムを思案中です。しかしながら、他学会との研修の整合性などから良いプランが見つかっていない点が課題です。

●これから研修受け入れを検討している病院へメッセージをお願いします。

業務負担等の切実な問題を抱えている施設も多いかと思います。しかしながら、研修生の受け入れる準備や実際の受け入れにより、自施設を見直すきっかけとなることや、指導にあたる薬剤師の成長にも繋がると感じておりメリットもあります。

●これから研修参加を考えられている薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

研修を修了された先生から、がん患者さんへの説明や対応に自信を持つことが出来る様になったとの感想をいただき、中には薬局の抗がん薬治療のチェック体制を構築された先生もいます。研修参加を検討されているのであれば、百聞は一見に如かず、是非チャレンジして欲しいと思います。

勤務薬局へ還元ができる研修

日本調剤　浦安中央薬局
和田　祥一

■薬局概要

①薬剤師数：正社員７名、パート３名
②月の処方箋応需枚数：4,500 枚
③がん患者数（月平均）：150 名程度

■外来がん治療認定薬剤師または専門薬剤師の取得有無（無しの場合は今後の取得予定）

外来がん治療専門薬剤師（2022.04 ～）

●研修に参加しようと思ったきっかけは？

私は 2019 年８月に現在の薬局に異動をしてきましたが、それまではがん治療にあまり関わったことがなく、処方箋をみても理解できることが少ない状態でした。それでは患者さんへの服薬指導はもちろんの事、情報収集も難しいため、知識をつける必要性を感じていました。そのような時に外来がん治療認定治療専門薬剤師の育成方針が勤務している会社より出されましたので、認定取得のために参加希望を出しました。

●研修病院である国立がん研究センター東病院はどのような視点で選びましたか？

研修後の復習時間などの事も考え、自宅と同じ都道府県からピックアップをし、希望を出しました。

●研修参加にあたって勤務している薬局からはどのような支援がありましたか？

連続（連日）研修であり、自宅から研修病院まで少し離れているため、研修病院の近くにマンスリーマンションを借りていただきました。また、研修費用を会社に負担していただき、薬局内でも他店舗から少し応援スタッフを補充頂していただくなど、集中して勉強ができる環境を準備していただきました。

●研修にあたり準備したことがあれば教えてください。

JASPO から「5 大がん」に関する動画も含まれた資料の提供が研修前にありましたので、全部目を通してから研修に参加しました。当時はがんに関する知識があまりなく、提供資料以外に何をしたら良いかが検討がつきませんでしたが、幸い研修先病院の門前薬局（同グループ系列）に外来がん治療専門薬剤師がいましたので、過去の研修内容等を聞き、おすすめの書籍などを教えていただき、準備を進めることができました。

●研修プログラムで特に興味深かったこと、印象に残ったことがあれば教えてください。

研修により病院内の様々な部分を見聞きできましたが、最も印象に残った点は大腸がんの患者さんが多かった事に起因するかもしれませんが、「ストマ」の部分でした。研修前まではあまり知識として必要のない部分でしたので、実際に見学をした際には想定していたものとは異なっている事に驚き、また非常に衝撃を受けました。

研修中は総じて毎日が充実していましたので、大きな苦労はありませんでしたが、注射剤の抗がん剤についてもっと添付文書等を読んでおくことが出来れば、研修中の理解がさらに深めることができると思いました。

●研修後に意識の変化などはありましたか？

がん治療の関連では自らが中心となり、テレフォンフォローアップ等の取り組みを始めたところ、薬局内のスタッフからも「このような場合は、どのように対応したら良いのか」、「このような電話を受けたが、どのように対処したら良いのか」など、よく質問を受けるようになり、その際にアドバイスもできるようになりました。その中でも例えば副作用部分は有無をただ聞くのではなく、どの程度なのかを聞くように努めるようになりましたので、少しずつですがより深い内容を聞くことが出来るようになってきていると感じています。

●研修後に薬局にて役立ったエピソードがあれば教えてください。

勤務薬局の門前病院はレジメンの公開をしていませんが、好発する副作用情報等からレジメンを推測することや患者さんが病院より提供されている用紙なども見せてもらったりすることが多くなりました。また、投薬時にどんな副作用が起こり易いかを指導しやすくなり、テレフォンフォローアップの取り組みが強化できるようになったことにより病院との連携も少しずつできるようになりました。

●研修参加を検討している薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

最初は少し戸惑いや異なった環境で緊張してしまうかもしれませんが、限られた時間の中での研修になりますので、積極性を持って是非研修に臨んでほしいと思います。積極的に取り組むことにより、知識も深まると思いますし、薬局に帰った際にも研修で得た知識を還元することができると思いますので、少しでも興味のある方は是非参加を検討してみてください。

事例4

週1～2日研修

病院でしかできない経験、学びを

国立大学法人 島根大学医学部附属病院
玉木　宏樹

■病院概要

①病床数：600 床
②薬剤師数（内、外来がん治療に従事する薬剤師数）：42 名（18 名・兼務）
③外来化学療法件数（月平均件数）：約 380 件
④特徴（各種研修やアピール等）：
・トレーシングレポートを用いた保険薬局との連携や薬剤師外来について、医療機関側での運用方法や病院薬剤師による薬学的介入の内容を学ぶことができる。
・他の研修生とがん患者カンファレンスなどを合同で行っており、研修生間での情報共有や繋がりができる。
・薬剤部内の研修会（症例報告会など）に参加することができる。

●研修病院になるきっかけを教えてください。

当院には JASPO の会員が 2 名在籍しており、また、近隣の保険薬局において研修参加の希望がありましたので申請しました。今後、保険薬局との更なる連携強化が必要になりますので、とても良いタイミングでした。

●受け入れにあたって苦労された点や調整された点は？

研修は主にがん領域の業務に従事する薬剤師が担当しますが、曜日や時間によって業務量が異なるため、スケジュール調整に苦慮しました。また、がん治療に関わる院内会議に参加していただくための院内調整などを行いました。

●研修プログラムを組む上での工夫したことなどがあれば教えてください。

病院薬剤師が実際にどのような業務をしているのかを知る機会は少ないと思います。折角の機会ですので、調剤業務や注射薬業務などの中央業務を含め、病院薬剤師の業務全般を経験していただくようにしました。また、保険薬局で実際に関わっている患者さんの症例についてディスカッションする場（がん患者カンファレンス）を設けました。保険薬局での指導や副作用管理において難渋している点や介入のポイントなどについて、がん領域の有資格者や症例に関わった病院薬剤師などが参加して意見交換を行っています。他にも、新規レジメンの申請書や論文について、レジメン審査を担当している薬剤師からレクチャーを受けながら評価し、関連する院内会議に参加することで、レジメンの申請から承認に至るまでの病院薬剤師の関わりについて学んでいただいています。

●研修者の受け入れにより部内の負担は増えましたか？

業務の負担は増えましたが、できる限り研修日を調整するなどして負担が軽減できるようにしました。

●先生の病院では週 1 ～ 2 回の研修にて受け入れをされていますが、ご意見などがあればお聞かせください。また、30 日（回）という研修期間についてもあわせてご意見などがあればお聞かせください。

研修スケジュールは研修生とも相談しながら決定しました。病棟研修の期間は、週 1 回の研修では、治療開始前の指導から治療後の副作用管理、退院時指導までの一連の関わりができないため、週 2 ～ 3 回など間隔を短く詰めて研修を行うことにしました。研修期間については、長期の研修が困難な保険薬局や受け入れ施設もあるかと思います。研修の機会を増やす、門戸を広げるという意味では、30 日という研修期間は良いのではないかと思います。

●研修受け入れをして発見された事や課題があれば教えてください。

当院は他学会の研修生も受け入れていますが、研修期間や研修時間が異なります。また、薬学生病院実務実習もありますので、業務負担やスケジュール調整を考えると、複数の研修生の受け入れはなかなか難しいと感じています。今後、研修機関が増えていくことを期待しています。

●これから研修受け入れを検討している病院へメッセージをお願いします。

薬剤部というやや閉鎖的、恒常的な環境に外部の方が入ることにより、いつもと違う風が吹き込むように感じます。院内においても、がん治療における一員としての薬局薬剤師の存在を再認識していただく良い機会になっています。また、今後の保険薬局との円滑な連携に繋がるものと思います。ぜひ前向きに検討してみてください。

●これから研修参加を考えられている薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

病院でしかできない経験、学びがあります。意欲のある薬局薬剤師の先生はぜひ前向きに検討してみてください。

病院内の業務を経験することにより日々の業務がスムーズに

日本調剤株式会社 島大薬局
金田　昌之

■薬局概要

①薬剤師数：９名

②月の処方箋応需枚数：４,000 枚

■外来がん治療認定薬剤師または専門薬剤師の取得有無（無しの場合は今後の取得予定）

取得なし。今後取得予定。

●研修に参加しようと思ったきっかけは？

「専門医療機関関連薬局」の認定を受けることが一番のきっかけですが、私自身ががんに関する知識をもっと持ちたいとの意欲がありましたので、会社に相談をし、研修に参加させていただきました。

●研修病院である島根大学医学部附属病院はどのような視点で選びましたか？

現在、がん患者さんの処方を多く応需している中で今後のさらなる連携強化を考え、門前病院である島根大学医学部附属病院を選びました。

●研修参加にあたって勤務している薬局からはどのような支援がありましたか？

薬局内のスケジュール調整の他に研修費用の負担をしていただきました。

●研修にあたり準備したことがあれば教えてください。

ｅラーニング「メディカルナレッジ」内の注射剤の調製方法部分の視聴やがんのガイドラインの確認をすることにより、事前準備を進めました。研修中は治療状況の把握等の際に役立ち、理解を深める事ができました。また、現在店舗でフォローをしている患者さんをピックアップする事により、治療の変遷等が理解できました。

●研修プログラムで特に興味深かったこと、印象に残ったことがあれば教えてください。

全体的には病院薬剤師の業務は私にとって新鮮で非常に興味深いものばかりですが、その中で栄養チームとの研修やカンファレンス、外来がん患者さんへの患者指導この２点は印象に残っています。中でも､患者指導は指導方法や算定部分を実際に見学、経験することにより、日々の業務の反対側を見ているような感覚を非常に勉強になりました。

なおその反面、点滴の商品名をもう少し覚えて参加したほうが良かったのでないかと感じました。

●研修後に意識の変化などはありましたか？

抗がん剤の点滴治療への理解が深まり、店舗にフィードバックすることで店舗全体の理解が深まり、患者様へのフォローがより充実してきたことを実感しています。例えば、以前は内服薬に比べ、点滴薬の処方監査は充分とはいえませんでした。現在ではレジメン毎に前投薬や支持療法が適切であるか処方監査が行えています。また、外来がん患者さんの患者指導に同席し服薬指導のポイントを聞くことで、レジメンの類推が現在まで以上にしやすくなりました。

連携についても研修によって実際に病院の中から見る事で病院のスタッフの動きが分かるようになりましたし、より顔の見える関係を構築することができ、トレーシングレポートや疑義照会などの日々の業務が行いやすくなりました。

また病院薬剤師の先生からトレーシングレポートの書き方についてアドバイスをいただいたり、副作用の評価について教えていただいたおかげでトレーシングレポートの内容も以前より良くなっているように感じます。

●研修後に薬局にて役立ったエピソードがあれば教えてください。

まだ研修中のため、特筆するようなエピソードはまだありませんが、研修中に薬局でフォローしている患者さんが外来で点滴を受けた際に、処方監査を通じて治療の変遷や医師の処方意図、医師がどのあたりを注意しているかが確認できました。

●研修参加を検討している薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

私自身が保険薬局にしか勤務経験がありませんのでしたので、病院研修というもの不安を感じていましたが、実際に研修に入ってみますと非常に学びやすい環境で良い経験をさせていただいております。

一見ハードルが高そうに見えますが、患者さんへのフォロー、また連携強化などを考えた場合、病院の中の業務を理解し、経験できることは必要であると思いますし、自らの知識の向上につながっていきますので、興味がある方は是非参加を検討してみてください。

事例5

連続　週3日研修

実務を通して学んでもらう研修

昭和大学病院
門田（かどた）　那々子

昭和大学病院
金（きん）　正興

■病院概要

①病床数：815 床
②薬剤師数・外来がん治療に従事する薬剤師数：76 名・腫瘍センター：1 名
③外来化学療法件数（月平均件数）：900 件
④特徴（各種研修やアピール等）：
地域がん診療連携拠点病院、がんゲノム医療連携病院、
日本臨床腫瘍薬学会がん診療病院連携研修認定施設
日本医療薬学会がん専門薬剤師研修施設

●研修病院になるきっかけを教えてください。

「地域がん診療連携拠点病院」のため、地域医療連携に力を入れており、薬局からの個別研修の受け入れを行ってきました。さらに本研修の受け入れにより、地域のがん医療推進に貢献しようと考え、申請をしました。

●受け入れにあたって苦労された点や調整された点は？

病院へは事前に受け入れの了承を得て、薬剤部内へは薬剤部責任者会議にて研修概要などを説明、了承を得ました。また、事前に化学療法業務を担当する薬剤師とも受け入れに関する協議を行いました。

●研修プログラムを組む上での工夫したことなどがあれば教えてください。

入院および外来ともに多くの患者さんと話しが出来るように「実務を通して学んでもらう形」で業務を組みました。中でも、患者さんとどのように医師がコミュニケーションをとっているのかをチェックしてもらうという医師の診察への同行はカリキュラムの中でも重点を置いています。また、血液内科の骨髄移植、臍帯血移植や末梢造血幹細胞など、外来ではなかなか見る事のできない部分は施設の状況やチーム医療などを実際に見てもらうことができる事も特色 1 つです。

●研修者の受け入れにより部内の負担は増えましたか？

研修初期は学生実習も受け入れている事もあり、慣れるまでは業務のペース配分等の部分は多少負荷がありましたが、研修が進むと逆に研修生より教えていただく事の方が多く感じる程、負担が軽減しました。

●先生の病院では週 3 回の研修にて受け入れをされていますが、ご意見などがあればお聞かせください。また、30 日（回）という研修期間についてもあわせてご意見などがあればお聞かせください。

外来の抗がん剤治療で一人の患者さんをずっと追っていく場合や曜日によって診療科の特色などは定期的に同じ曜日に診た方が良いかと思いますが、例えば入院部分のカリキュラムの中に含まれているオンコロジーエマージェンシー部分のエマージェンシーが起きた際に危険な状態からどのようにして改善し、また外来に繋がるのかという流れ等は病院研修の醍醐味ではありますが、やはり飛び飛びではなく連続での研修でないとなかなか難しいのかなと思っています。そのため、理想になりますが、固定の曜日で 2,3 日外来に来ていただき、入院は 2 週間程度を連続でしっかり来ていただくという形で強弱をつける形がより従来の特徴をみることができるのではないかと思います。

●研修受け入れをして発見された事や課題があれば教えてください。

薬局の薬剤師とディスカッションする機会が増えたため、より薬局への理解が深まりました。そのため、退院時や外来での患者指導時に薬局薬剤師からの助言が生かされるようになりました。また、実習に来ている薬学部の学生が薬局薬剤師の話が聞けることも良い経験になっていると感じています。
課題としては、年間を通して薬学生の実習を受け入れているため、特定の病棟を担当する薬剤師の負担が増えてしまっているため、調整が必要なことでしょうか。

●これから研修受け入れを検討している病院へメッセージをお願いします。

本院では、詳細なカリキュラム設定はしていませんが、大きく外来と病棟を割振り、研修を行いながら、カリキュラムの到達度を評価する方法でも対応できています。学生実習の受け入れを行っている施設であれば、対応可能な研修と考えています。また、研修を受け入れることで、薬局でのがん患者対応への理解が深まり、より充実した退院指導や外来指導が可能と考えます。

●これから研修参加を考えられている薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

病院での研修は不安もあるかも知れませんが、沢山の質問をしていただくことで、お互いの学びが深まると思います。研修開始前に基本的ががん治療に関する知識の整理も大切ですが、実際の投薬時に疑問に思ったことなどを整理して、研修に臨まれるとより充実した研修になると思います。

患者さんからのさらなる信頼を得られる研修

かもめ薬局 旗の台店
広池（ひろいけ）　暁子

■薬局概要

①薬剤師数：2 人
②月の処方箋応受枚数：900 枚
③がん患者数（月平均）：150 人

●研修に参加しようと思ったきっかけは？

がん患者をサポートする上で病院との連携は重要であり、連携強化のためには病院での治療の流れや業務について深く知る必要があると考えていました。病院での勤務経験がない薬局薬剤師にとって、病院で実際に実務が行える研修は貴重な機会になりますので、病院でのがん治療やがんチーム医療について学びたいと考え、参加を決めました。

●研修病院である昭和大学病院はどのような視点で選びましたか？

可能であれば、普段受けている処方箋の発行元がよいと考え、昭和大学病院を希望しました。

●研修参加にあたって勤務している薬局からはどのような支援がありましたか？

薬局に在籍した状態で、30 日間の病院研修に参加したため、私が行っていた日中の薬局での業務を他のスタッフが代わりに対応するなど調整をしてくれました。私が抜けることで負担が増えたと思いますが、「ぜひ研修に参加してきてほしい」など温かい言葉をもらいました。

●研修にあたり準備したことがあれば教えてください。

学会から事前に提供された「5 大がん」に関する資料と、がん化学療法のレジメン集を購入して、事前学習した上で参加しました。ただ、それらに掲載されていないレジメンも多く、現場で初めて見るレジメンについては非常に苦労しました。症例を担当させてもらう前に事前の準備をすることは、研修を充実させるためにとても重要だと感じました。

●研修プログラムで特に興味深かったこと、印象に残ったことがあれば教えてください。

外来の診察に同席させていただく機会があり、医師と患者さんとのやりとりにはとても感銘を受けました。治療の経過が厳しいといったつらい話を医師が伝えることや患者さんが「もう治療をしたくない」と愚痴をこぼすなど、さまざまなケースがありましたが、深い信頼関係が築いている様子を目の当たりにして、がんの薬物治療のサポートを行う上で、その人にとってどういう存在になるべきかを改めて考えさせられました。

●研修後に意識の変化などはありましたか？

日々がん患者さんの治療にあたる医師や薬剤師、多職種のスタッフと話しや実際の臨床を経験することで、書籍などで学んだ知識が確固たるものに変わっていったものが多くありました。また、病院と薬局の薬剤師の視点の違いを感じることも少なくありませんでした。病院の薬剤師はエビデンスベースで物事を考えるトレーニングがなされているのに対して、薬局の薬剤師は患者さんの生活ベースで考えることが多いと思います。自分たちの足りないものと強みの両方を感じることができ、とても勉強になりました。

●研修後に薬局にて役立ったエピソードがあれば教えてください。

これまでは処方箋に書かれた薬に関するフォローしかできていませんでしたが、研修を受けることによって、患者さんが病院で受けてきた外来化学療法も含めてトータルな薬学的管理を考えられるようになったのが 1 番の成果だと思います。薬局薬剤師が、病院での治療に関する知識や理解を深めることは、患者さんにとって大きなメリットになると思います。

●研修参加を検討している薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

がん患者さんの処方箋を多く受けている薬局だけではなく、全ての薬局の薬剤師にがん診療病院連携研修を受けてほしいと思います。がんになっても、かかりつけの薬局に通いたいと考える患者さんはいると思いますので、そうした患者さんたちを支えるために、書物などで勉強するだけではなく、臨床の場での研修に参加し経験を積むことはとても大切なことであると思います。病院での治療なども知ることができる点も大きな経験になると思いますし、逆に病院の方々に薬局のことを知ってもらう絶好の機会でもあります。多くの人が門をたたいて、飛び込んでくれることを願っています。

事例6
週1日研修

通常の病院業務中心で実施ができる研修

一般財団法人 慈山会医学研究所
付属 坪井病院
合津（ごうつ）　貴志

■病院概要

①病床数：230 床（うち緩和ケア病棟 18 床）
②薬剤師数（内､外来がん治療に従事する薬剤師数）:11 名（2 名）
③外来化学療法件数（月平均件数）：100 件
④特徴（各種研修やアピール等）：
「間質性肺炎・肺線維症センター」があり間質性肺炎合併肺がん診療も積極的に行っている。

●研修病院になるきっかけを教えてください。

当院薬剤部として病院での診療のながれと病院薬剤師のかかわりを経験できる研修を検討していたが、手続きの関係上、研修を受け入れる事がなかなか難しい状況でした。そのような中、JASPO にて新しい研修制度が始まり、内容が望んでいたものと一致していましたので、迷いなく研修施設の申請をしました。

●受け入れにあたって苦労された点や調整された点は？

病院に申請をして、初日に各部門（検査、放射線、ホスピス）の見学ができるようにしました。学生実習では薬剤師は常に学生に付き添いますが、研修者に対しては研修の進み具合や理解度に応じて、研修者単独での患者指導を実施をしてもらいました。また、研修最終日には独自の研修修了証書を院長名で作成してもらえるように病院に依頼をし、お渡しをしました。

●研修プログラムを組む上での工夫したことなどがあれば教えてください。

研修は「無菌調製」、「薬剤師外来」、「病棟業務」の大きく３つに分けました。まず、認定薬剤師と薬剤師外来で研修を開始し、一連のがん治療の流れを説明、患者面談を見学、実際に面談を実施しました。その後、病棟で診断から治療導入、外来治療への移行の流れの理解や他職種との連携を見学、研修者に実践してもらいました。また、１日のみですが感染管理として ICT 薬剤師と同行し、院内の感染管理や抗菌薬使用について経験をしてもらいました。呼吸器疾患や消化器がん患者を主に診療している病院のため、経験できない診療科もありますが、普段実施している業務や他職種との連携をそのまま見てもらうということを意識しました。

●研修者の受け入れにより部内の負担は増えましたか？

研修初期は確かに業務内容を伝えるため負担が増えましたが、研修の理解度により研修者の自主性を尊重し単独での行動を可とし、患者指導前後に指導薬剤師に報告することで対処しました。研修後半には研修者と服薬指導を手分けして実施できるようになりました。

●先生の病院では週 1 回の研修にて受け入れをされていますが、ご意見などがあればお聞かせください。また、30 日（回）という研修期間についてもあわせてご意見などがあればお聞かせください。

まず 30 日の連続研修であると 1 人の患者さんに 1 クールだけ介入して終わりになってしまう可能性がある反面、週に 1 回の場合は約７ヶ月にもわたる為、外来でも病棟でも複数回同じ患者さんにお会いでき、多くの介入ポイントを見つける事ができる点が大きいですね。また、研修に実際に参加される方も連日の研修であると負担が大きく、課題などを持ち帰っての復習等も難しいと思いますので、週 1 回の研修の方がより理解を深めてもらえるかと思います。

●研修受け入れをして発見された事や課題があれば教えてください。

研修初期は業務の流れなどを説明する時間が必要ですが、研修の中で経験を積み、理解を深めることによって成長し、最終的には 1 人、スタッフが週 1 日のみ増えているような状況となりました。また、研修者の業務に対する意欲が非常に高く、知識も外来がん治療認定薬剤師を受験するレベルでしたので、部内スタッフも大いに刺激されました。

●これから研修受け入れを検討している病院へメッセージをお願いします。

JASPO のがん診療病院連携研修カリキュラムは特別なことを求めているわけではなく、普段、病院薬剤師が行っている薬剤管理指導業務や無菌調製などの業務を研修者に見学させ、経験をさせることでカリキュラムはクリアできると思います。当院のような十分に設備が整っていない中小の病院でも研修受け入れは可能ですので、興味を持っている施設はがんに精通した薬局薬剤師の育成のためにも手をあげるきっかけになれば幸いです。

●これから研修参加を考えられている薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

実際の診療の流れを見聞きし、多くのがん患者さんに接する事は自身の業務で必ず活かされると思います。今までは他施設での長期間にわたる研修はなかなか参加しにくいところがありましたが、「専門医療機関連携薬局制度」により外来がん治療専門薬剤師の認定を取得することで自身の勤務している薬局にもメリットがある為、より上長の理解が得やすくなったと思います。是非勇気をもって上長に研修への思いを伝えてみてください。

研修での経験・学びを実務に活かしていく事ができる研修

クオール薬局郡山店
菅野（すげの）　友美

■薬局概要

①薬剤師数：8 名（内 1 名パート）
②月の処方箋応需枚数：3,000 枚
③がん患者数（月平均）：500 名程度

■外来がん治療認定薬剤師または専門薬剤師の取得有無（無しの場合は今後の取得予定）

2021 年度外来がん治療認定薬剤師 受験中
上記取得後、外来がん治療専門薬剤師申請予定

●研修に参加しようと思ったきっかけは？

以前からがん領域に興味があり、薬局薬剤師としてがん患者さんのために何ができるかについて考え、JASPO を始めとした外部勉強会への参加、社内でもがんに関する勉強会の企画等をしていました。しかし、学んだ知識を実際の患者さんに対して活かすという部分を考えたとき、やはり薬局側の視点だけでは限界があると感じていました。がん患者さんが病院の中でどのような流れで治療を受け薬局に来ているのか、医師や薬剤師がどのように考えて判断し今回の治療になったのかなど、患者さんの治療全体を把握した上で、薬局薬剤師としてがん患者さんをしっかりフォローできるようになりたいと考え、研修に参加しようと思いました。

●研修病院である坪井病院はどのような視点で選びましたか？

研修を通して学んだ事を自身が働いている薬局だけではなく、今後の地域がん医療に活かせたらと考え、勤務している薬局と同じ医療圏にある坪井病院を希望しました。

●研修参加にあたって勤務している薬局からはどのような支援がありましたか？

週 1 回、計 30 回、約 7 か月間の長期にわたる研修になりますので、当初は私自身参加してよいのか迷いがありました。上長に相談をしたところ、時間や費用を含めて様々な支援が受けられる事を知り、また「ぜひ研修を受けてきてほしい」という言葉に背中を押され、研修を受けることにしました。あわせて薬局内のシフト調整や不在時の対応などのサポートもあり、とても心強かったです。

●研修にあたり準備したことがあれば教えてください。

実地研修前に受けた JASPO の入門セミナーの内容（大腸がん・胃がん・乳がん・肺がん・血液がんの病態や治療について）を復習すると同時にがん治療に関する様々な本を購入し、基本的な知識をしっかりとつけた上で研修に臨みました。また、自身が持つかかりつけの患者さんに対しては事前に後日フォロー等を含めお伝えをし、同時に薬局内も代理の対応などの調整をし、来局時にも困らないよう準備をしました。

●研修プログラムで特に興味深かったこと、印象に残ったことがあれば教えてください。

医師の診察前にがん患者さんと面談し、アドヒアランスの確認や副作用の確認を行い、医師への報告・処方提案や薬局に対して「情報提供書」を作成し情報共有する“薬剤師外来”を経験できた事です。研修期間中に薬剤師外来だけで計 84 名もの患者さんと面談することができました。また、今までは処方箋と患者さんから聴取した情報のみで副作用の有無や症状の増悪・改善を評価していましたが、この薬剤師外来を通じて、患者さんから聴取した情報にプラスして、実際に症状を観察し、検査値等から CTCAE で評価、その上でガイドライン等に基づいた処方提案や患者さんへの指導を行うことで自信がつきました。
また、今回「外来がん治療認定薬剤師」の試験を受けていますが、10 症例の内 2 症例はこの病院研修中に対応した方によるものです。対象があまり取り扱いのない呼吸器に関するがん種であった事もありますが、先生にも症例をみていただき、書き方などのアドバイスをいただきました。

●研修後に意識の変化などはありましたか？

病院研修を通して、各職種との情報共有の重要性を感じ、薬局で情報が来るのを待つだけではなく、薬局薬剤師として服薬指導の中で得た患者さんの情報や気になったことを「情報提供書」などで積極的に発信していこうという意識に変わりました。

●研修後に薬局にて役立ったエピソードがあれば教えてください。

病院にてベバシズマブを点滴している大腸癌患者さんの服薬指導を行った時に、病院では正常範囲内である血圧が自宅で起床時に測ると高値である事を聴取しました。血圧自己測定をしているものの記録などを取っておらず、医師にも伝えていなかった為、血圧手帳を配布して次回受診時まで記録し診察時に医師へ見せるよう指導をし、医師にこの事を「情報提供書」で報告しました。結果、次回受診時に降圧剤追加になっており、患者さんからも「先生から血圧手帳をみせてと言われた。事前に伝えてくれてありがとう。」と感謝の言葉がありました。

●研修参加を検討している薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

薬局薬剤師にとって病院研修というと少しハードルが高い印象があるかもしれません。実際に研修前の私自身がそうでした。しかし、研修が始まり、病院薬剤師の業務を通じてがん領域に関する様々な事を学び・経験し、それを研修の中だけでなく、実際に薬局の業務で患者さんの治療に活かせた時に、“この研修を多くの薬局薬剤師が受けてほしい”と心から思いました。研修参加を検討している薬局薬剤師の方にはぜひおすすめしたいです。

事例7 連続研修

受け入れ側にもより良い効果がある研修

福岡大学筑紫病院
内山　将伸

■病院概要

①病床数：310 床（一般 308 床、感染 2 床）
②薬剤師数（内､外来がん治療に従事する薬剤師数）23 名（4 名）
③外来化学療法件数（月平均件数）：
312 件（2021 年 4 ～ 12 月実績）
④特徴（各種研修やアピール等）：
地域がん診療連携拠点病院である福岡大学病院とのグループ指定により「地域がん診療病院」の指定を受けています。研修では日本医療薬学会 がん専門薬剤師およびがん指導薬剤師が中心となり指導を実施しています。

●研修病院になるきっかけを教えてください。

これまでも日本医療薬学会および日本病院薬剤師会のがん研修生受け入れ施設として施設認定を受けていたため、申請をさせていただきました。

●受け入れにあたって苦労された点や調整された点は？

研修受け入れ前は薬剤師のマンパワー不足により、外来におけるがん患者へは初回指導を中心に行い、外来化学療法室での指導は限定的でした。JASPO がん診療病院連携研修を受け入れるにあたり、本格的に外来化学療法室での指導を開始し、現在では約90%の患者に対して介入を行なっています。

病院側とは受け入れ許可を得るのみでしたが、薬剤部内では業務シフトを調整し、外来化学療法室での指導時間の充実を図りました。

●研修プログラムを組む上での工夫したことなどがあれば教えてください。

「研修生の積極性を重んじる」といった部分を大切にしています。例として、当院では日々の指導する患者さんを指導薬剤師からは提示せずに研修生自身で電子カルテを使って癌腫や過去の指導記録などを参考に選択していただきます。研修生が興味をもった症例や学んでみたい癌腫について、事前の情報収集および必要な知識の習得を積極的に実施することに重きを置いています。さらに、当院では CTCAE による有害事象評価において薬剤師間での評価が一致するように意識しています。そのため、患者指導の前に Grade 判定基準について説明し、重点的に学んでいただいています。

●研修者の受け入れにより部内の負担は増えましたか？

講義や指導に要する時間は業務に対する負担とはなりましたが、講義資料を「がん薬物療法のひきだし（書籍）」（福岡大学薬学部で教科書として採用）をそのまま使用することで、準備に要する時間を削減しました。また研修生による指導（必ず指導担当薬剤師が同席）をもって連携充実加算を算定しています。

上記のとおり負担もある反面、実際に研修生を受け入れる事により、部内にも変化がありました。若手薬剤師は業務に対するモチベーションが向上し、指導薬剤師は教育を通じて曖昧な知識の確認ができ、研修生とのディスカッションを通して薬局薬剤師目線を経験することで、外来化学療法室での指導の幅が広がっているように感じます。

●先生の病院では連続研修にて受け入れをされていますが、ご意見などがあればお聞かせください。また、30 日(回)という研修期間についてもあわせてご意見などがあればお聞かせください。

当院では本研修以外に日本医療薬学会のがん専門薬剤師研修を受け入れた経験があります。病院薬剤師を 5 年間に渡り指導するわけですが、研修生の来院頻度は月に 1 回程度であるためコミュニケーションの部分では少々難しさを感じることがありました。その点、連続研修の場合、日々顔を合わせることになりますので、密にコミュニケーションを取ることが可能になります。30 日間という期間はちょうど良いと感じています。

●研修受け入れをして発見された事や課題があれば教えてください。

研修受け入れをしてみて、現状で２つの課題があると思っています。1 つ目は当院では研修を専任で対応している訳ではありませんので、指導に要する業務負担の増加、また研修生に関りが持てない時間の問題が生じてしまいます。ここは様々な工夫をしてみていますが、一期間で一名の研修生受け入れでも、通年で研修生がいる状況のため、なかなか難しい課題です。もう 1 点は研修生の知識差の部分です。研修に対する意欲は概ね高いのですが、特にがん薬物療法に対する知識的な差は激しいと感じています。今後は研修実施の前に認定を保持していない研修生に対しては、学力試験を実施するのも良いかもしれません。

●これから研修受け入れを検討している病院へメッセージをお願いします。

研修生を受け入れ指導することを通じて以下が期待できます。
①知識向上・アウトプットによる知識の整理
②ディスカッション・プレゼン能力の向上
③他者へのフィードバックを通じて客観的視点の育成
④他者への情報提供による教育・啓蒙

●これから研修参加を考えられている薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

病院薬剤師の業務や思考方法ならびに他職種との協働について理解を深めることは薬局での研修者自身の業務に何らかの変化をもたらすと思っています。また、皆様が病院で研修することは、職員への刺激になるかと思います。ぜひ積極的な研修を行い、多くのことをお互いに学びましょう。

がんを総合的に捉えることが出来る研修

株式会社 ミズ　溝上薬局
八坂（やさか）　瑞臣（みずおみ）

■薬局概要

①薬剤師数：4～5名
②月の処方箋応需枚数：2,800枚
③がん患者数（月平均）：250～300名

■外来がん治療認定薬剤師または専門薬剤師の取得有無（無しの場合は今後の取得予定）

外来がん治療認定薬剤師
取得済み
外来がん治療専門薬剤師（暫定認定）

●研修に参加しようと思ったきっかけは？

医療者連携よりももっとがん患者さんにフォーカスした連携を見える形で実施したいと思っていましたので、薬局の姿をもっと「見える化」し、参加型の連携として必要十分領域にしたいという思いがありました。また、昨年夏に「専門医療機関連携薬局」が制度化され、人的要件をクリアすることも参加申請の理由に挙げられます。

そして、社内でも外部研修に積極的に参加しているという姿勢を増やしていきたいという部分もありました。

●研修病院である福岡大学筑紫病院はどのような視点で選びましたか？

がん症例が多く対応でき、知識の継続的な定着を目的として連続研修が可能な施設を基準に選択をしました。その際に自宅からの車通勤が可能な点もあわせて検討し、車で30分～40分程度で通える福岡大学筑紫病院に申請しました。

●研修参加にあたって勤務している薬局からはどのような支援がありましたか？

連続研修である為、薬局内の勤務シフトは調整を頂きました。また、社内に対しては連携研修に参加する意義を理解していただけるように説明はしましたので、大きなトラブルもなく、逆に参加の後押しをしていただきました。また研修費用につきましても会社に理解を頂き、負担をしていただきました。

●研修にあたり準備したことがあれば教えてください。

知り合いの病院薬剤師の方に、病院業務の一般的な流れについて私の認識に食い違いがないか確認をしました。次に、薬局で担当しているがん患者さんもいましたので、お知らせや細かい引き継ぎをしておきました。また、研修前にはJASPOより必須となっていたｅラーニング受講を軸に、過去のセミナーや書籍による知識整理を行い、モチベーションを高めるようにしました。

●研修プログラムで特に興味深かったこと、印象に残ったことがあれば教えてください。

一番印象に残った点はレジメン監査です。また、研修に参加するにあたって多くの症例を見たいという思いがありましたので、外来化学療法室で患者さんに実際に指導させていただいた点は非常に活かせる研修内容でした。「有害事象」での副作用の評価方法などを詳細に知ることができ、どのように処方提案を持っていくとよいかという点などを再確認できました。医療は総合的に連携し、実践することにより意味があると思いますので、そのような面からも研修で得ることが出来たものは大きかったです。

●研修後に意識の変化などはありましたか？

今以上に、一人の患者さんを丁寧に対応していきたいと思うようになりました。また治療内容を詳細に聞く事や有害事象の評価方法、処方提案、遺伝子治療への意識は研修前より強くなったと思います。

そして、医療機関とのがんに関する会議や研修、地域薬局との取り組みの強化へさらに動き始めている状況です。

●研修後に薬局にて役立ったエピソードがあれば教えてください。

薬局全体に研修内容や患者さんへの向き合い方をフィードバックしたこともあり、がん患者さんへの専門的な対応の重要性の理解が深まりました。また、病院に対するトレーシングレポートや処方提案への意識も上昇しているように感じています。

●研修参加を検討している薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

ご存知のようにがん患者さんが増える中で、薬局での外来治療での関わりは増々多くなっています。専門的なサポートや時系列における関わりはがん患者さんには特に不可欠です。

がん患者さんを総合的に診ること、トータルサポートという観点からも、この連携研修は知識や実務含めて多くの学びが得られます。また、がんに関する壁を取り払う動機づけになるかもしれません。熱意を持ってチャレンジしてみてはどうでしょうか。

事例8
連続研修

薬局との連携が深める事ができる研修

独立行政法人 労働者健康安全機構
横浜労災病院
稲田　佑亮

■病院概要

①病床数：650 床
②薬剤師数(内､外来がん治療に従事する薬剤師数)：43名(6名)
③外来化学療法件数（月平均件数）：525 件
④特徴（各種研修やアピール等）：
地域がん診療連携拠点病院

●研修病院になるきっかけを教えてください。

施設内容や研修施設としての認定もすべてクリアをしていたので、まずは手をあげてみようかと考えました。また、実際に当院も他の施設と同様に近隣薬局との連携にあまり力を入れていませんでしたので、本研修を機に連携を深める事が出来ればと考え、申請をしました。

●受け入れにあたって苦労された点や調整された点は？

座学部分は学会の方で e- ラーニング等も含めて準備をしていただけ、基本的には薬局である程度経験を積まれた薬剤師さんが来るため、大きな問題もなくスムーズに受け入れることができました。院内調整についても関連の部局、医師などとは通常から連携をとっているため、この部分についても説明をし、大きな問題なく了承をいただくことができました。

●研修プログラムを組む上での工夫したことなどがあれば教えてください。

まず、先行して本研修を実施していた川崎市立多摩病院や近隣病院の先生より情報を提供いただき、それを参考にスケジュールを作成しました。

スケジュールの基本は午前中に外来化学療法室で、午後は病棟での研修を行い、院内カンファレンス、診察見学などはその都度参加をしてもらうようにしましたが、実習が難しい部分等は見学を少しずつ組み込むことでリカバリーをしました。総じて、がんの部分だけでは終わらずに、病院薬剤師の業務全体を経験してもらえるように心がけました。

●研修者の受け入れにより部内の負担は増えましたか？

最初は各種業務や病院全体部分の説明などがありますので、一時的に業務的な負担は増えましたが、研修が進むにつれて相互に理解も進み、業務効率も上がりました。また、薬局の様々な情報を聞くことができたことにより勉強にもなり、それまでにはあまり進んでいなかった薬薬連携も本研修を機にトレーシングレポートの雛形作成や研修会の実施なども進み、部内のモチベーションアップにも繋がっています。

●先生の病院では連続研修にて受け入れをされていますが、ご意見などがあればお聞かせください。また、30 日(回)という研修期間についてもあわせてご意見などがあればお聞かせください。

連続研修の場合、外来の患者さんであると複数回会える患者さんが少なくなってくるというデメリットがありますね。週１回などの少し長期にわたる研修になると毎回決まった患者さんに半年や年単位で診ることができますので、経過を追う部分では良いなと感じる反面、入院の患者さんに対しては今回の研修でも何名か担当をしてもらっていますが、そのような部分では連続研修の方が良いかと感じて。なかなか難しい部分である為どちらが良いとは一概に言えませんが、実習も大切にしつつ、座学も並行して進めていかないといけませんので、連続研修の方が集中的に学べるのではないかと思っています。

●研修受け入れをして発見された事や課題があれば教えてください。

患者さんから聞き取りをする際に、病院薬剤師では一言二言程度であるところ、想定よりも多くの情報を聞き取り出来ていたため、情報の引き出し方などはこちらが学ぶこともあるなと率直に感じました。また、本院でも化学療法室でトレーシングレポートを渡していますが、それが実際どのように使われているのか、どういう情報が必要とされているのか、薬局から聞くことがことは薬薬連携の上でも大きな意味があると思います。

課題としては先にもあげましたが、連続研修であると１人の患者さんに複数回の指導を行うことが難しい点でしょうか。

●これから研修受け入れを検討している病院へメッセージをお願いします。

施設により制約や考え方の問題がありますので、研修の受け入れはなかなか難しい問題であると思います。多くの薬剤師が在籍していても他の研修や数多くの業務で人員を割くことができない施設もあるかと思いますが、研修生の方々は一定の経験を積まれていて、患者さんの対応については病院薬剤師よりも上手なレベルであり十分に対応できますので、施設の運用などについて説明するだけで、ある程度の業務を行うことできます。また、本院のように病院（部）内のモチベーションアップにもつなげることができますので、是非前向きに検討をしてみてはいかがでしょうか。

●これから研修参加を考えられている薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

薬局では見えにくかった部分が研修の中での様々な経験によってクリアになり、理解も深まります。また病院という施設の中での研修になる為、がん領域に限らず、総合的に見聞きする事で、臨床能力や幅広い知識の習得にもつながります。参加を考えられている薬剤師の方は是非検討をしてみてください。

新たな視点を見つける事ができる研修

株式会社アインファーマシーズ
アイン薬局 西新宿店
友清（ともきよ）　えりか

■薬局概要

①薬剤師数：29 名
②月の処方箋応需枚数：10,500 枚
③がん患者数（月平均）　500 名

■外来がん治療認定薬剤師または専門薬剤師の取得有無（無しの場合は今後の取得予定）

2022 年受験予定。

●研修に参加しようと思ったきっかけは？

学生時代からがんについてしっかりと経験を積みたいと考えていましたので、がんの処方箋を多く応需している店舗への配属を希望しました。幸い希望が叶い、抗がん剤を服用中の患者さんには多く接する機会がありましたが、点滴に関しては扱う機会がなく知識は少ないままでした。また、自分自身満足できるような勉強ができておらず、患者さんへのサポートが不十分であると感じていました。そのため、かかりつけ薬剤師として担当している患者さんに対しても、症状や体調にあわせたフォローがもっとできるのではないかと感じており、研修への参加を希望しました。

●研修病院である横浜労災病院はどのような視点で選びましたか？

がんに罹患しながら他の治療もされている患者さんへしっかりとしたフォローができるようになりたいという希望から、がん以外の治療も並行しながら受診できる病院、施設で研修したいと考えていました。横浜労災病院は腫瘍内科があり、幅広いがん治療に対応されていることから希望しました。

●研修参加にあたって勤務している薬局からはどのような支援がありましたか？

スケジュール調整のみならず、社内の研修経験者から事前にアドバイスや学習ツールの提供などがあり、研修に取り組みやすい状況でした。

●研修にあたり準備したことがあれば教えてください。

処方箋の主応需先病院では、支持療法のほとんどを院内処方としていたため、点滴治療中の患者さんの処方箋を受ける機会が少なく、最新情報を得ることが難しい状況でした。そのため、有害事象に限らず投与スケジュールをメインに学び直しました。また、研修先病院のホームページでレジメンが公開されており、研修前にチェックし、ガイドラインを参考に治療のトレンドを学びました。

●研修プログラムで特に興味深かったこと、印象に残ったことがあれば教えてください。

まず研修では血液内科や緩和のカンファレンスに参加させていただき、医師診察、看護師面談、栄養指導などを見学させていただくことにより、医師をはじめとする多職種連携を体感できたことは、非常に新鮮で勉強になりました。特にカンファレンスにおいてさまざまな分野の専門家が集まることで、新たな視点が生まれ、問題解決への道が開けるシーンを目の当たりにできた事は非常に大きな経験でした。また、逆に医薬品の流通状況や他病院における治療などについて質問をいただき、情報交換をすることができました。薬局の中ではどうしても薬剤師という視点から物事を見るため、視野が狭くなってしまいがちですが、今回のこの経験を今後の業務にも活かしていきたいと思います。

●研修後に意識の変化などはありましたか？

服薬指導の際、患者さんからお話を伺いますが、強く訴えのある症状のみが薬歴に記録されてしまい、それ以外の症状の聞き取りがもれてしまうことがあります。そのため、薬歴記載にばらつきが生じやすく、Grade 評価の浸透も遅れていると感じていました。記載表現が曖昧で経時的な管理が難しく、治療開始前後でどのように症状が変化したのか、有害事象と捉えている症状が果たして化学療法によるものなのか、という判断も難しくなっていたため、薬局業務に戻ってから、スタッフ全体で Grade 評価記載を徹底すると同時に、治療開始前の便秘や疲労感、皮膚状態の聞き取りを強化しました。また、化学療法を受けている患者さんには、以前は来局一週間後に電話フォローを実施していましたが、治療内容によって有害事象の発現タイミングが異なることから、症状の出やすいタイミングに変更しました。その結果、患者さんからタイムリーな聞き取りができるようになり、病院へのトレーシングレポートでのフィードバックも充実した内容になりつつあります。

●研修後に薬局にて役立ったエピソードがあれば教えてください。

がん患者さんに対し、口内炎や便秘時のフォローなど具体的な提案ができるようになりました。また、研修中はがん治療だけでなく、今後転移する可能性のある臓器や、それを確認するための検査方法なども学ぶことができました。電話フォローで聞き取った体調変化に対し、今後起こりうることや対処薬、必要と思われる検査の提案もできるようになりました。

●研修参加を検討している薬局薬剤師の方へメッセージをお願いします。

薬局薬剤師は患者さんにとって身近な存在である一方、自発的に行動しなければ、外部の医師や他職種とかかわる機会が少なく、視野も狭くなりがちと感じました。病院研修に参加することで知識が得られるのはもちろん、他医療スタッフからたくさんの刺激を受けることができます。薬局に戻ってから多くのことを還元できるので、自分だけでなく、薬局の他スタッフにとってもメリットがあると思います。

認定研修施設一覧　（令和４年１月31日現在）

北海道	KKR札幌医療センター
北海道	製鉄記念室蘭病院
北海道	手稲渓仁会病院
北海道	函館五稜郭病院
北海道	北海道がんセンター
北海道	市立函館病院
北海道	王子総合病院
北海道	市立旭川病院
北海道	札幌禎心会病院
青森県	八戸市立市民病院
岩手県	岩手医科大学附属病院
宮城県	大崎市民病院
宮城県	仙台医療センター
宮城県	東北大学病院
宮城県	宮城県立がんセンター
秋田県	秋田大学医学部附属病院
秋田県	由利組合総合病院
秋田県	大館市立総合病院
山形県	山形県立新庄病院
山形県	山形大学医学部附属病院
福島県	福島県立医科大学附属病院
福島県	竹田綜合病院
福島県	坪井病院
茨城県	小山記念病院
茨城県	土浦協同病院
茨城県	日立総合病院
栃木県	栃木県立がんセンター
栃木県	獨協医科大学病院
群馬県	渋川医療センター
群馬県	高崎総合医療センター
群馬県	群馬大学医学部附属病院
埼玉県	上尾中央総合病院
埼玉県	埼玉医科大学国際医療センター
埼玉県	埼玉県立がんセンター
埼玉県	彩の国東大宮メディカルセンター
埼玉県	自治医科大学附属さいたま医療センター
埼玉県	戸田中央総合病院
埼玉県	獨協医科大学埼玉医療センター
埼玉県	埼玉医科大学総合医療センター
埼玉県	草加市立病院
千葉県	国立がん研究センター東病院
千葉県	千葉西総合病院
千葉県	東邦大学医療センター佐倉病院
千葉県	亀田総合病院
千葉県	新松戸中央総合病院
東京都	国立がん研究センター中央病院
東京都	順天堂大学医学部附属　順天堂医院
東京都	昭和大学病院
東京都	帝京大学医学部附属病院
東京都	東京医療センター
東京都	東京都立墨東病院
東京都	東邦大学医療センター大森病院
東京都	練馬総合病院
東京都	がん研究会有明病院
東京都	日本医科大学付属病院
東京都	東京女子医科大学付属足立医療センター
東京都	東京都立駒込病院
東京都	日本大学病院
東京都	東邦大学医療センター大橋病院
東京都	国立国際医療研究センター
神奈川県	神奈川県立がんセンター
神奈川県	川崎市立多摩病院
神奈川県	北里大学病院
神奈川県	日本医科大学武蔵小杉病院
神奈川県	横須賀共済病院
神奈川県	横浜労災病院
神奈川県	横浜医療センター
神奈川県	神奈川県警友会けいゆう病院
神奈川県	東海大学医学部付属病院
神奈川県	横浜市立市民病院
神奈川県	聖マリアンナ医科大学病院
神奈川県	昭和大学横浜市北部病院
神奈川県	横浜市立大学附属病院
石川県	金沢医科大学病院
石川県	加賀市医療センター
長野県	飯田市立病院
長野県	長野市民病院
長野県	信州上田医療センター
長野県	慈泉会相澤病院
長野県	伊那中央病院
岐阜県	松波総合病院
静岡県	聖隷浜松病院
愛知県	小牧市民病院
愛知県	名古屋市立大学病院
愛知県	名古屋医療センター
愛知県	春日井市民病院
愛知県	藤田医科大学病院
三重県	松阪市民病院
三重県	三重大学医学部附属病院
三重県	済生会松阪総合病院
三重県	伊勢赤十字病院
滋賀県	滋賀県立総合病院

滋賀県	東近江総合医療センター
滋賀県	社会医療法人誠光会 淡海医療センター
京都府	京都医療センター
京都府	京都第一赤十字病院
大阪府	大阪国際がんセンター
大阪府	大阪労災病院
大阪府	市立吹田市民病院
大阪府	松下記念病院
大阪府	淀川キリスト教病院
大阪府	大阪府済生会中津病院
大阪府	市立豊中病院
大阪府	市立東大阪医療センター
大阪府	堺市立総合医療センター
大阪府	大阪南医療センター
兵庫県	市立芦屋病院
兵庫県	姫路医療センター
兵庫県	姫路赤十字病院
兵庫県	宝塚市立病院
兵庫県	神鋼記念病院
兵庫県	神戸市立医療センター西市民病院
和歌山県	日本赤十字社和歌山医療センター
和歌山県	和歌山県立医科大学附属病院
鳥取県	鳥取大学医学部附属病院
島根県	島根大学医学部附属病院
島根県	浜田医療センター
岡山県	岡山赤十字病院
岡山県	倉敷中央病院
岡山県	津山中央病院
岡山県	岡山大学病院
岡山県	天和会 松田病院
広島県	尾道総合病院
広島県	広島市立広島市民病院
広島県	広島大学病院
広島県	呉医療センター
広島県	中国労災病院
広島県	マツダ株式会社マツダ病院
広島県	広島市立安佐市民病院
山口県	岩国医療センター
徳島県	徳島赤十字病院
香川県	香川大学医学部附属病院
愛媛県	愛媛大学医学部附属病院
愛媛県	四国がんセンター
高知県	高知赤十字病院
高知県	高知大学医学部附属病院
高知県	高知医療センター
高知県	高知県立あき総合病院
福岡県	九州医療センター
福岡県	九州大学病院
福岡県	福岡大学筑紫病院
福岡県	地域医療機能推進機構 九州病院
福岡県	福岡徳洲会病院
福岡県	大牟田市立病院
佐賀県	佐賀大学医学部附属病院
長崎県	長崎医療センター
長崎県	長崎みなとメディカルセンター
熊本県	熊本医療センター
大分県	中津市立中津市民病院
大分県	別府医療センター
大分県	大分大学医学部附属病院
大分県	南海医療センター
宮崎県	宮崎大学医学部附属病院
鹿児島県	いまきいれ総合病院
鹿児島県	今村総合病院
鹿児島県	川内市医師会立市民病院
鹿児島県	鹿児島厚生連病院
鹿児島県	霧島市立医師会医療センター
鹿児島県	相良病院
沖縄県	那覇市立病院

＜編集後記＞

我々は令和２および３年にがん診療病院連携研修に参画していただいた研修者（薬局薬剤師）と、当該研修者を受け入れてくださった研修病院の指導担当者の８組 16 人の方々に対して、令和４年１月 17 日～ 29 日まで１組１時間程度の取材を行いました。当該研修には、30 日の連続研修（休診日を除く６週間連日にて修了）および通年研修（研修開始から１年以内に修了）の２種類があり、研修者の勤務先の状況等に応じて、選択できることになっています。今回の取材を通して、連続研修の研修者では、シームレスにスキル習得の機会を得たこと、入院患者への薬剤管理指導業務、病棟薬剤業務に連続的に触れる機会を得たことにより、密の濃い実習を行うことができたこと。通年研修の研修者には、研修を通して、外来がん化学療法患者に継続的に関与することにより、外来がん治療認定薬剤師の認定試験に必要な「がん患者への薬学的介入実績の要約」の数事例を記載することができたとの報告を受けました。さらに、いずれの研修者とも、病院での研修に高いハードルがあると感じていたが、高い意欲があれば、がん治療における共通用語や、有害事象のグレーディングの習得に加え、病院に勤務する医師、薬剤師、看護師等が求めるトレーシングレポートを作成することができ、有意義な研修となることは間違いないとの意見を多くいただきました。
一方、研修病院の指導担当者からは、研修を受け入れたことで、薬局薬剤師への外来がん患者への情報提供にあり方について、意見交換を行う良い機会となったとのコメントをいただきました。
本誌を通して、がん診療病院連携研修の認定病院が増えるとともに、多くの薬局薬剤師の方々が、がん診療病院連携研修に参加していただくことを期待しており、すべての薬剤師が力を合わせ、安全、安心な外来がん治療を遂行できればと考えております。

日本臨床腫瘍薬学会　専門性の高い薬局薬剤師の養成推進 WG
近藤 直樹、縄田 修一、長沼 未加、松村 敦子

JASPO

2022（令和４）年３月 10 日発行